

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

RCC 発足四半世紀に向けて

RCC センター長 打樋 啓史 社会学部教授



歴史を紡いでくださった方々のお働きに敬意の念を抱いています。

一九九七年四月、関西学院大学に「キリスト教と文化研究センター」(RCC)が発足してから今年で二四年目、来年二〇二二年四月には二五周年を迎えることになります。二〇一九年度にセンター長に就任した際にここで挨拶をさせていただきましたが、その一期(二年間)を終えて、この度センター長として二期目を務めさせていただくことになりました。RCCが四半世紀を迎える前年にあたり、この時にセンター長の役目を担うことになる責任の重さをひしひしと感じつつ、これまでのRCCの歴史を導いてくださった神に心から感謝し、その

歴史を紡いでくださった方々のお働きに敬意の念を抱いています。

の二年間これらのプロジェクトをすべて継続し、昨年度の遅れを取り戻しつつさらに発展させていくことになりました。各プロジェクトについて簡単に説明させていただきます。

最初に、打樋(社会学部)が代表を務める「ことばの力ーキリスト教の視点から」プロジェクトです。本プロジェクトの目的は、本質的に「ことばの宗教」であるキリスト教において、言葉が果たしてきた役割を学際的な視点から考察することです。言葉の希薄化が問題となっている今日、「ことばの力」回復の糸口を探る一助となれればと願います。今年度に入ってから既に二回の研究会をZoomで開催し、各研究員の成果報告が進められています。

第二に、「エコロジカル聖書解釈」プロジェクトについては、本紙の次頁以降に代表の大宮有博研究員(法学部)より詳細な報告がありますので、そちらをご参照ください。

第三に、常設となっている「キリスト教主義教育」プロジェクトは、二〇一九年度からの「今

日の日本社会におけるキリスト教大学の存在意義と使命」というテーマを継続して進めていきます。代表は東よしみ研究員(神学部)です。二〇二〇年度には『建学の精神考』第五集の刊行を完了しましたので、今年度以降は講演会や公開研究会の開催を中心に活動していくことになります。

最後に、加納和寛研究員(神学部)が代表を務める「映画とキリスト教」プロジェクトであるキリスト教に関連する映画のデータブック出版に向けた作業を行なうことを主として活動していきます。この本で取り上げる比較的新しい映画百十作品中、既にほぼすべての原稿が提出済みであり、今後出版に向けて詰めていくこととなります。この他に、映画上映とそれに続く講演会・討論会なども計画しています。

この四つの研究プロジェクトを核として、研究員一同、二五周年に向けて精一杯取り組んでいく所存です。学内の皆様のご理解とご協力をどうぞよろしく願います。

■研究プロジェクト報告

■研究プロジェクト エコロジカル聖書解釈

「創造の季節」に聖書を読みましよう

RCC 主任研究員 大宮 有博

新しい教会暦「創造の季節」とは

近年、カトリック、正教会、世界協議会(WCC)に世界福音同盟(WEA)やローザンヌ運動も加わって、教会暦に新しい「季節」として「創造の季節」(Season of Creation)を加えようとする運動が盛んです。教会の一年は、プロテスタントの教会暦を例にあげると、イエス・キリストの生涯を想起する「主の半年」(待降節、降誕節、受難節、復活節)とペンテコステ以降の「教会の半年」(聖霊降臨節)から成ります。

三位一体論の観点から今使っている教会暦を見ると、キリストと聖霊の働きを讃える

トリックが「創造の日」と定めた九月一日から、エコロジーの聖人アッシジのフランシスコの日である十月四日までの

四主日を含む五週間を言います。これはもともと一九九〇年代半ばに、オーストラリア

のルーテル教会や合同教会などで自然発生的な運動として

始まりました。その後、この運動はフィリピン、南アフリカ、ヨーロッパ、北米のカトリック、聖公会、ルーテル教会、各地の合同教会に広がりました。二〇〇八年、WCC中央

委員会は、加盟教会に「創造の時」を守るように呼びかけました。

今年の創造の季節のテーマは「全てのものの家?..神の

オikosの刷新」です。昨年、WCCは「創造の季節」に向けて、神学的アジェンダをまとめた Cultivate and

Care、実践集 Cooler Earth、子供向けの学習資料 Climate

Justice Toolkitを提供しました。これに加えて創造の季節のホームページ (<https://seasonofcreation.org/>) では、

各教会が創造の季節に参加しやすいように、様々な資料を提供しています。

「創造の季節」に聖書を読む

教会はこの季節に聖書の言葉

をどう読み解くべきでしょうか。そこでエコロジカル聖書解釈の出番です。エコロジカル聖書解釈は、深刻な環境問題について真剣に考えるキリスト者が、その世界観や人間観を批判的に見直す中で生まれた聖書解釈のアプローチ

であり、人間以外の動植物をも含めたすべてのいのちに価値を認める聖書の「読み」を目指します。この聖書解釈は、

これまでの聖書解釈が聖書テクストを「二元論的ヒエラルキー」「人間中心主義」のメガ

ネで読んでいたことを指摘しました。すなわち聖書テクスト

は人間も動物や植物、地や水、空もみな神によって造られたものとして

いるのに、そのテクストの解釈者たちは、人間

を他の被造物から分け、人間には神に代わって被造物を支配する役割を持つとする考えに縛られています。

私たちは、このようなメガネをはずして聖書のテクストと向き合うことによって、人間社会によって搾取され、抑

圧され、声を奪われた神に造られた世界の声をテクストから聴き、環境危機に立ち向かうための新しい世界観(『例

えば『生物中心主義的総合的世界観』イヴオーネ・ゲバラ)を構築することができるとは

ないでしょうか。その「読み」の手法の一つが、解放神学の

聖書の読みでもある「懐疑の解釈学」です。

研究会のメンバーは、この手法を用いて、聖書物語に登場する人間以外の登場者に語

らせてみようかと試んでいます。また聖書を一貫する大きな救

いの物語を、さらに大きな自然の歴史に位置づけて再解釈

してみようと考えています。

例えばヨナ書には人間と神以外に海や魚、とうごまといっ

た

た

た被造物が物語を進めていきます。ですがその物語には神と人間の声しか記されていません。魚やとうごまにも声を与えてみたら、物語はもっと彩豊かな物語になるのではないのでしょうか。

またローマの信徒への手紙八章一九―二三節あるいはコロサイの信徒への手紙一章一五―二〇節には、人間とそれ以外のあらゆる生命が和解し解放されたことを目指す宣言と読むことができます。『ラウダート・シ』はコロサイ書のテクストに、すべての被造物の運命が、先在するキリストの神秘と結びついていることを指摘します。新約聖書によると、イエスは、神に造られた世界に受肉され、そして復活後も神に造られた世界にあらゆる被造物を通して現存しています。

創造の季節に、このように聖書を読むことによって環境正義を回復するための世界観を構築したいと考えています。

キャンパスの中のキリスト教シンボル (14)

RCC 主任研究員 橋本 祐樹

RCC ニューズレターの連載「キャンパスの中のキリスト教シンボル」では、すでに二〇一九年度のニューズレターでステンドグラスを取り上げ、そこでは特に上ヶ原の大学図書館に設置されている作品「光あれ」(森場さとし、一九九七)をご紹介しました。今回は続いて神学部チャペルに設置されているステンドグラスをご紹介します。周知の通り、ステンドグラスは着色されたガラスの組み合わせによって造られるもので、ガラスに当たる光を想定して建築物の窓に設置されます。そこに込められる意味、目的は様々ですが、主要な点は装飾や物語表現にあると見られます。では、神学部チャペルのステンドグラスに込められる意味とはいったい何なのでしょうか。

神学部チャペルには写真1のステンドグラス「XII+I」(二〇一一)が会衆席の奥、説教者の椅子のちょうどすぐ右上に、チャペルに射す光を取り入れるのに適した位置に取り付けられています。作成者は二〇〇六年三月に本学神学研究科前期課程を修了した林知子さんで、このチャペル以外にも三宮YMCA会館チャペル、東武鉄道東京スカイツリー線曳舟駅ビル曳舟病院、海星マリア幼稚園等

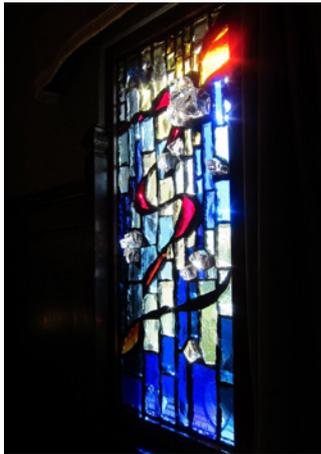


写真1

曳舟駅ビル曳舟病院、海星マリア幼稚園等

でも彼女の作品を見ることが出来ます。

神学部チャペルのこの作品は彼女の制作活動の初期のもので、命の水、洗礼の水が背景に表された上で、そこにイエスに従う弟子たちを表現する立体感のある十二のガラスの塊が置かれます。弟子たちに降る聖霊の炎を表すのは赤いガラスです。ご本人の言葉によれば、制作にあたっては、そのステンドグラスのもとに座る説教者が「聖霊が自分自身にも注がれ、強められることを感じ、語る事が出来るように。そして司会者は、ステンドグラスのもとに座る説教者に向かって降ってくる聖霊を見て、これから語られる言葉が神様に支えられ、聖霊に強められたものとなることを覚え、祈ることが出来るように」との思いを込めたそうです。

実際の作品には厚さ二五ミリ〜三〇ミリの厚みのあるガ

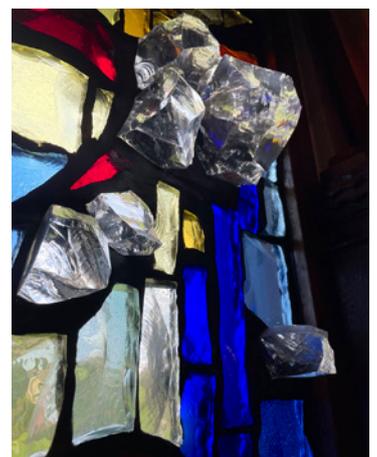


写真2

ラス、さらに氷の塊のような立体感のあるガラスが用いられており、それらを通して光がよく乱反射して輝くのも特徴です(写真2)。鍛冶屋が金槌を振り下ろして炎の中で刀を鍛えるように「ガラスによって光を鍛える」。そのような気持ちで製作にあたっていても彼女は語っていました。

神学部チャペルで語る人、語られる言葉にあてられる、まるで祈りのような光。ぜひ神学部チャペルでご覧ください。



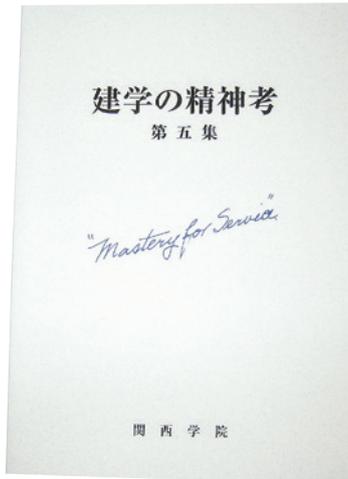
RCC 活動報告

『「建学の精神」考』第五集の刊行報告

RCC 主任研究員 東 よしみ

二〇二〇年一二月に『「建学の精神」考』第五集が刊行されました。『「建学の精神」考』は、関西学院の建学の精神の意味を学院構成員が共有していくために「キリスト教主義教育研究室」によって発刊され、一九九三年―一九九八年に第一―三集が刊行されました。RCCがこのプロジェクトを引き継ぎ、第四集を二〇一五年に刊行しました。

今回の第五集は、二〇一五年四月から二〇二〇年三月の



本院の刊行物の中から『チャペル週報』を中心として建学の精神に直接間接に関わる文章を集めました。文章の選定、編集、校正は、「キリスト教主義教育プロジェクト」のメンバー全員で行いました。第五集の特色として、教職員の文章だけでなく、卒業生の文章も掲載したことがあげられます。

本書によって、建学の精神が形骸化することなく、活きた、リアリティのあるものとしてその構成員や卒業生に力を与え続けることを願っています。キリスト教と文化研究センター（吉岡記念館事務室）で配布していますのでぜひお立ち寄りください。

RCCキリスト教講座について

RCCセンター長 打樋 啓史

RCCでは、一九九八年度から本学の学生保護者を対象とした「父母のためのキリスト教講座」を開始し、二〇一四年度より名称を「RCCキリスト教講座」に変更して開催するようになりました。二〇一九年には本学の西宮北口キャンパス開設に伴って、会場を上ヶ原キャンパスから新キャンパスに移し、それまでよりも多くの受講者を得るようになりました。

二〇二〇年度春学期、新型コロナウイルスの影響で対面の講座開催を中止せざるを得なくなり、同年度の秋学期には初の試みとしてオンデマンドのYouTube動画配信で講座を実施することにしました。結果、多くの方々が動画視聴によって受講され、二〇二一年度春学期も同じ方法で開催しました。以下、これまでオンデマンド動画配信で実施してきた講座の内容です。

二〇二〇年度秋学期には、橋本祐樹氏（神学部）を講師として、「キリスト教の宣教を考

える―その課題と可能性をめぐって」というテーマで四回の動画を配信しました。多様な宗教を信じる人々が共生する現代においてキリスト教の「宣教」とは何かを基本的問いとして、現代の宣教に関する諸課題を紹介するという内容で、九月から十二月まで以下の通り実施されました。

第一回「聖書における宣教」
第二回「キリスト教宣教の問い直し」

第三回「現代のキリスト教宣教（1）―他者のための教会」他

第四回「現代のキリスト教宣教（2）―他宗教とは何なのか」他

二〇二一年度春学期には、小田部進一氏（神学部）を講師として、「宗教改革から今を考える―ルターとの対話を通して」というテーマで四回の動画配信が行われました。キリスト教のプロテスタントの「はじめり」である十六世紀ドイツの宗教改革者マルティン・ルター

の生涯と思想を、絵や写真も交えて紹介するという内容で、四月から七月まで以下の通り実施されました。

第一回「ルターと死の問題」
第二回「ルターとキリスト教的な人間の自由」
第三回「ルターとペスト」
第四回「ルターと家庭」

二〇二一年度秋学期には、嶺重淑氏（人間福祉学部）を講師として、同様に動画配信で講座を開催します。一日も早い対面での講座の再開が望まれる一方で、動画配信という試みによってキリスト教講座の新しい可能性を見出すことができたのは大きな収穫であったと言えます。

昨年年度はコロナのためRCCの活動が制限された部分がありました。ネットを通じた講座配信や研究会実施等、新しい積極的な展開も生まれました。

対面での学びと交流の豊かな実現を願いつつ昨年度に得られた知見を生かして今年度の活動を進めています。（H）

編集後記

